

バランスシートとは会社の経営上の健康状態を判断するもので貸借対照表とも言います。会社の資産や負債を表にまとめたものです。資産は自分のものですからプラス、負債は借金など自分のものではなく借りたもの、返すものですからマイナスと考えて、プラス以上にマイナスつまり負債が大きいと将来大変ですし、プラスが多ければ成長を見込むことができます。信仰者の歩みもプラスの部分が増えて、マイナスの部分が減ってゆけばより健康的な信仰生活を送ることができます。パウロはそのような信仰者の歩みを衣類を着ることに関連させて語っています。

先ず着ること、身に付けることですがコロサイ 3:12は「それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい」と、五種類の着物をあげています。この五種類の着物は、今日は「謙遜」、明日は「柔和」というように、毎日取り替えて着るというのではなく、それは一度に重ねて着るものです。そして、この五枚の着物は、それを身に着ける順番に並べられていると思います。つまり、「深い同情心」は下着、「慈愛」はシャツ、「謙遜」はベスト、「柔和」は上着、「寛容」がコートといった具合です。この五つの着物の中で、いちばん大切なのは、最初にあげられている「深い同情心」です。なぜなら、他のすべてのものは、これに基づき、この上に重ねられていくからです。

「深い同情心」というのは「憐れみ」とも訳されます。けれどもそれは強い者が弱い人たちを見下してかわいそうに思っただけではありません。聖書でいう「憐れみ」はそのようなものではありません。ヘブル 13:3に「牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやり、また、自分も肉体を持っているのですから、苦しめられている人々を思いやりなさい」とあります。これは、信仰のゆえに、迫害を受けて投獄されている人のことを言っています。初代のクリスチャンは、いつ投獄され、拷問されても不思議ではありませんでした。牢につながれたのは、あの人たちではなく、自分だったかもしれないのです。冷たい石畳に座らせられ、手に鎖をつけられ、足かせをはめられるだけで、どんなに苦しく、辛いことでしょう。投獄された人たちは、たましいにおいてはキリストのために苦しみを受けるに足るとされた喜びを味わっていたでしょうが、肉体においては痛みを感じていたはずで、「自分も肉体を持っているのですから」というのは、同じ生身のからだを持っている者として、そうした人々の痛みを感じとるようということを教えているのです。自分を他の人と同じ立場において、その痛みを共有すること、それが「憐れみ」です。同じようなことばで「かわいそうに」ということばが新約聖書に 8 回出てきます。実はこのことばはイエス様だけに使われていることばです。「かわいそうに」とは単に同情するという意味のことばではなく、はらわた・腸がちぎれるほどの痛みを覚えるという意味のことばです。私たちはそこまで人の痛みや苦しみを体験することは出来ません。しかし主イエスは私たちが悲しみに打ちひしがれている時に、心傷つき落ち込んでいる時に、それほどの思いをもって共に悲しんでくださることこの言葉は意味しているのです。「憐れみ」や「深い同情心」は、一番はじめに身に着けるべきものです。そして、そこから「慈愛」、つまり、人に対するやさしく親切な態度が生まれてきます。キリストの「憐れみ」の心を知る人は決して高慢になりません。いわゆる親切の押し売りのようなことをして、人をコントロールしようとはしません。「謙遜」と「柔和」を身に着けています。さらに自分の狭い考えに閉じこもらず、違った意見を持つ人にも心を開く「寛容」を身に着けてもいるのです。神の「憐れみ」がどんなに豊かで、キリストの「同情心」がどんなに深いものであるかを、みことばから学び、生活の中で体験し、祈りによって自分のものにしていきたいものです。

さて、クリスチャンが身につけるべき、五つのものを見ましたが、こうしたものを身につけるためには、当然のことですが、今まで身に着けていたものを脱ぎ捨てなければなりません。8節には脱ぎ捨てる

べきものが、やはり五つあげられています。それらは「怒り、憤り、悪意、そしり、恥ずべきことば」です。「喜怒哀楽」というように、「怒り」は人間の感情の中でも基本的なものです。すべての怒りが悪ではありません。神様もお怒りになります。また義憤、つまり正義のための怒りは必要です。それが無くなると、世の中に間違ったことがまかり通るようになります。聖書が教える「寛容」は、神が与えた真理までも変えてしまうような、無制限の「寛容」ではありません。真理がないがしろにされる「寛容」はもはや「寛容」でなく、「妥協」であり事無かれ主義です。真理を守り、正義と公平を守るために怒りは大切な働きをするのです。しかし、怒りというものは自分のわがままと結びついて、暴走してしまうことが多いので、それは正しく治めなければなりません。次に「怒り」が態度になり、行いになったものが、「憤り」です。家庭内暴力や殺人事件の多くは、「ついカッとなって」と、憤りを抑えきれないために起こっていると言われます。最近の言葉では、「切れる」ということになるのでしょうか。昔は「切れる人」というと頭脳明晰な人のことを言いましたが現代では「切れる人」とは少し危険な人ようになってしまいました。人類最初の殺人事件もそうでした。創世記4章にカインとアベルの兄弟の話が出てきます。アベルは正しい動機と方法で神にささげ物を、それは羊でしたがしました。しかしカインはそうではありませんでした。それは地の作物、穀物でした。カインはアベルのささげ物が神に受け入れられたのに、自分のささげ物が受け入れられなかったのを知りました。その時、カインは自分を反省し、アベルを見習い、ささげ物をささげ直せば良かったのです。神もそのことを期待しておられました。神は一つもカインを責め立てたり、怒ったりはされませんでした。「何をそんなにあなたは怒っているのですか？」と聞かれただけです。しかし、カインは答えようとせず、激しい怒りを自分の内側に貯めこみました。カインは自分を顧みること、他から学ぶこともしないで、自分のささげ物が受け入れられなかったことを怒り、その憤りをアベルに向けたのです。そしてカインは、自分の怒りと憤りに身を任せ、アベルを殺してしまうという恐ろしい罪を犯してしまったのです。

私たちは生きていく限り、怒りを覚えるようなことに直面することが多いものです。しかし、そのつどそれに怒り散らし、憤っていたのでは、自分を駄目にし、人間関係を壊し、秩序を乱すだけになってしまいます。そうですね。いつも怒っている人のそばに近づきたいと思ったり、その人と仲良くなりたいたいなどと思う人はいないですね。最近、心理学の世界では「アンダー・マネージメント」「怒りのうまい取り扱い方」というものがありますが、私たちはそんな心理学的なテクニックとしてではなく、神が「あなたは、それを治めるべきである」と言われたことばのように、神の助けにより、怒りを正しく取り扱う必要があります。カイン以来、「怒り」、「憤り」は人類の本性、生まれながらの性質となってしまいました。そして、この怒りと憤りから「悪意」が生まれました。「悪意」と訳されていることばは「敵意」とも訳すことができます。それによって、人類の歴史は戦いの歴史となり、いたるところに争いを見るようになったのです。怒り、憤りと敵意の違いは何でしょうか？怒り、憤りは自分が関わりがあったり、知っている人に対して持ちやすいのですが敵意となると知らない人であっても、誰であっても、また漠然と社会に対して、何に対しても怒りを覚え、皮肉っぽい対応をしてしまうことです。実はそういった人こそ深く心傷つく経験をしていることが多いので、神様の愛と癒しが必要です。「怒り、憤り、悪意」の次に「そしり」とありますが、これは、人に対する侮辱やあげつらうことだけでなく、神への冒瀆をも意味しています。人は、人と争うばかりか、神とも争うものとなったのです。最後の「恥ずべきことば」というのは、卑猥な話のことを指しますが、そういう話でなくても、私たちは、なんと無駄なことばを数多く口にしていくのでしょうか。口数が少なくて失敗することがあるかもしれませんが、普通はことばが過ぎて失敗することのほうが多いものです。言わなくても良いこと、言っただけでいけないことを口にしてしまいやすい私たちに、聖書は「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養

うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい」(エペソ 4:29) と教えています。自分のためではなく、聞く人のために語るというのですが、実は、それは自分のためでもあるのです。どういうことかと言うと自分が語ることばを一番良く聞いているのは自分自身なのです。人は、自分の口で語ることばを自分の耳で聞いて影響を受けます。いつもつぶやきを口にしてしまうと、一緒にいる人に迷惑なだけでなく、そのことばが自分の心に入って、つぶやきを増幅してしまうようになりますから、注意しなければなりません。

私たちは「怒り、憤り、悪意、そしり、恥ずべきことば」を脱ぎ捨てたいと思います。ところがこれらは、たましいに染み込み、からだの一部になってしまったかのようになり、脱ぎ捨てるのが非常に難しくなっています。それは重なること、増えることがあっても、脱ぎ捨てることができないのです。しかし、ただひとつだけそれを脱ぎ捨てる方法があります。それは、そうした本性を持った自分が死ぬこと、そして、新しくされて復活することです。これができるのは、ただイエス・キリストによってだけです。キリストの十字架が私の罪のためであったと信じる者は、それによって自分の罪の性質を十字架につけ、古い自分に死ぬことができます。キリストが私を救うために死者の中から復活されたことを信じる者は、新しくされて、キリストとともに復活するのです。イエス・キリストの十字架と復活だけが、古い人を死なせ、その身にまもっていたものを捨てさせ、人を新しくし、人が本来持つべき、幸いなよそおいを身につけさせるのです。キリストを信じ、バプテスマを受けた者は、すでに、キリストとともに死に、キリストとともに復活しています。神の子どもとして生まれ、天に国籍を持つものとなりました。キリストを信じたとき、私たちの人生に新しい意味と目的が与えられました。物の見方、考え方が変わり、些細な出来事に左右されない喜びや平安を感じるようになりました。なによりも神と人への愛が心に芽生えました。「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです」(ガラテヤ 3:27) とある通りです。

しかし、同時に、地上にいる私たちは、罪の誘惑を感じ、実際に罪を犯します。キリストとともに死んだはずの古い自分がまだ力を持っているのを見ます。キリストを信じた者は、「古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて、新しい人を着た」(コロサイ 3:9, 10) はずではなかったのでしょうか。そうです。そのとおりのことが、すでに天で起こっているのです。信仰とは、この天で起こったことを地上で再現することです。キリストが古い私を死なせ、新しい私を成長させてくださることを信じて、古いものを捨て、新しいものを求めることです。信仰の生活は捨てることと得ることから成り立ちます。古いものを捨てることは「悔い改め」であり自分自身を主に捧げます。そうするとそれと引き換えに捧げても大丈夫という「神への信頼」という新しい体験を得るのです。

今日の箇所では、信仰生活が古い着物を脱ぎ、新しい着物を着ることにたとえられています。裕福な人は別として、わずかな着物しか持たなかった古代の一般の人にとって、着物を替えるというのは大変なことでした。時間も労力もかかったのです。信仰においても同じです。ほんとうの問題が、自分のうちにある古い性質にあることがわかるまでは時間がかかるでしょう。そのことを徹底して悔い改め、神に赦しを願い、きよめを願うまでに導かれるには、何らかの痛みを通らなければならないかもしれません。しかし、それを乗り越えてなお、前に進むことが信仰なのです。あなたが捨てるべき古いものとは何でしょうか？ あるいは何を捨ててきたのでしょうか？ 捧げてきたと言っても良いでしょう。その時に引き換えに神様からどんな良いものをいただいたのでしょうか。それはものでなくても神様への信頼が増し加えられたということならそれは大きな恵みです。信仰者として成長するとはそういうことです。救い主なるイエスを仰ぎ見、古い着物を脱ぎ、新しい着物を着ることによって信仰の成長をみる者とされてゆきましょう。